

カナダのコミュニティー、ブラジルの農村、日本のむら

元筑波大学 坪井伸広

この10年、カナダ、ブラジルの農村と深く付き合った。98年に農村活性化をテーマにカナダ側と共同研究を立ち上げ、主にオンタリオ州の農村を調査し、2008年に成果をとりまとめた。また、サンパウロ州に2006年7月から2か年滞在し、農村を歩きながら「ブラジル花卉産業史」の執筆、出版に従事した。オンタリオ州とサンパウロ州の農村での観察を踏まえて日本のむらを考えてみよう。

日本のむら（集落）は、昭和恐慌・戦時期および産業社会転換期の70年代を除き、明治以来近代化と民主化の障害とされてきた。80年代半ば以降はむらへの関心そのものが縮小した。むらはいま存亡の淵にあるが、それを傍観してはならないのであろう。

むらやコミュニティとは、たんなる居住者集団ではなく、人びとが共有する何らかの安心や信頼関係を基礎に、よりよい生活を目指す社会組織である。むらに関心を持つのは、この安心や信頼関係の累積こそが貨幣への信用を維持し、不安定な現代資本主義の崩壊を防ぐ最後の砦であり、むらの有無は安心や信頼関係と社会のあり様にかかわると考えるからである。

コーヒー、サトウキビの大農場開発に起源を持つサンパウロ州の農村社会は、20世紀初頭にあっても、解放奴隷、奴隷代わりの移民からなる大勢の農場労働者と一握りの農場管理者からなり、大農場主は都市に居住した。

この三者に運命共同体的な関係はなかった。日用品を農場が供給し、地域社会は農場ごとに分断されていた。

その後機械化で労働者が減少し、50年代後半以降の都市化、産業化と人口増加が経営者と労働者が農場内に居住する家族経営を増やした。彼らに日用品を供給する田舎町ができ、大都市近郊では都市中間層が別荘や土地を求めて転入、市街は大きくなった。

しかし、都市参入者の居住地は、塙と守衛常駐の門、常時巡回警備すなわち「かね」に守られたゲイテッド・コミュニティが転入先にすぎず、信頼関係によって結ばれたコミュニティにはならない。多くの低賃金労働者からなる農村の生活を守り、向上させるのは最低賃金の引き上げや労働環境を規制する「法」であり、住民の信頼に基づいた協同活動ではない。これがサンパウロ州農村の一つの原型で、日本やカナダの農村にみるむらやコミュニティはそこにはない。

ただ、法も「力」を基盤とするのではなく、人びとの信頼関係を背景にしてこそ真の効力を発揮する。言い換えれば、社会がむらやコミュニティからなるのか、単なる居住者集団にすぎないのかによって、治安、人びとの法に対する態度に差異が生じる。その背景を持たない法では文字表現だけが一人歩き、それに抵触しない行為は社会的に容認される。ブラジルでは裁判官、弁護士、政府高官

や警察官が法知識と権力を活用して法の裏をかき、網をくぐり抜け、あるいは法を逆手にとると多くのブラジル人が平然と語る背景はそこにある。同じ法治国家でありながらブラジルが日本やカナダとは異質な社会と感ずるのは、法の背景にコミュニティやそれが培う社会関係資本がないからであろう。ブラジルでは社会の基盤となる信頼関係は芽生えるさきから蝕まれてしまう。

カナダは4,000kmの国境でアメリカと接しながら銃社会ではなく、人口400万人のトロント大都市圏でも市民生活は平穏である。農村部ではいまでも家に鍵をかけずに外出する。オンタリオ州の農村はヨーロッパ移民の家族経営とその協同活動が作りだした社会で、最近まで人びとは無償労働によって道路・橋梁を管理、納屋を建設し、小麦や豆を収穫していた。収穫の協同労働は50年代にも存続し、その経験者がまだ健在である。また、60年代には学校と教会を中心に人びとは濃密な交流を持ち、生活と農業が維持されていた。さすがにいまこうした協同労働や交流はなくなつたが、コミュニティで培われた人びとの関係と行動様式のすべてが消えたわけではなく、一部は農村に埋め込まれている。^(注)

ブラジルは世界で治安最悪のグループに属する。サンパウロ市では銀行強盗や市街で拳銃殺人があつてもニュースにならない。巻き込まれないために窃盗や強盗を目の前にしても人は黙視する。先のゲイテッド・コミュニ

ティーでも侵入者と警備員がつながり高い塀が役立たないこともある。信頼関係がなく、超えがたい貧富の格差のあるブラジルでは貧しい者は追いつめられているのである。

資本主義は、生産手段とコミュニティから「解放」された労働者を基盤とした。1929年の大恐慌を経て資本主義は足るを知り、欲望を抑制する文化からもついに人びとを解放し、大衆を大量消費に目覚めさせて現代資本主義に変わった。しかし、貨幣と資本主義は依然不安定であり、80年代以来の市場原理主義が近年のアメリカ金融資本とグローバリゼーションによって暴走し、世界を新たな危機に追い込もうとしている。この危機を乗り切るにはもはや過剰消費を加速する需要創出ではなく、資本主義や貨幣の背景にある人びとの安心や信頼関係に注目せざるを得ない。

人びとを前近代の社会から解放して成立したようにみえる資本主義は、実は、その社会的蓄積の上に築かれたのかも知れない。それに気付かずその基礎を蚕食して繁栄を作りだした。サンパウロ州は土台となるべき社会を破壊し尽くした移民がコミュニティを作り損ねた社会ともみえる。ただ、同じブラジルでも、ヨーロッパ移民が家族農場経営を展開する南ブラジルは様相が異なる。

むらやコミュニティが安心や信頼関係の醸成にどのようにかかわり、現代社会の維持に寄与しているのか。それを明らかにするために再び日本のむらに光を当てたい。

(つばい のぶひろ)

(注) 『カナダ農村3農場200年の軌跡』(農文協、2008年)が開拓以来のオンタリオ州農村の生活を描いている。